授業探訪　「スペイン語圏の文化」

誤解と現実は紙一重

飯島　みどり

人間というのは至極勝手な生き物である。自戒を込めて言うのだが、己れの関心事は放っておいても目に入りながら、心の向かないもの、見たくないものは、たとえ目の前に突きつけられても全く心眼には視えてこない。いくら理路整然と物事を説明したところで聞く耳持たぬ相手には届かない。

私見によれば、立教大学をも含めた日本社会が国家主義の極めて強力な磁場と化して久しい。ここでいう国家主義とは、他の選択肢を予め去勢し国家という単位をありとあらゆる判断基準に据えて疑わない心性のことを指す。久しいといっても本当はたかだか百五十年余の教育の成果であろうが、異分子からみると、その精神の貫徹ぶりたるや驚嘆に価する。

ところがスペイン語圏の論理はおそらく日本的国家主義の対極に位置する。最も信用のおけない相手、それが国家である。そもそもスペイン語という言語の名称自体が、日本的国家主義によっては説明できない矛盾の塊を体現する。スペイン語はスペインという国家の言語、ではない*。かくも単純な出発点を受け入れてもらうことが「スペイン語圏の文化／社会」の目標になりかねないのも、○○国家と○○言語と○○人は三位一体のはずという常識が日本ではあまりに強固だからである。

実際、「スペイン語の授業」で４カ月近くメキシコやペルーあるいはアンデスの話題を採り上げてみても、期末テストの蓋を開けてみると「スペインでは」と書く答案が続出する。高校までの地理教育に責を押しつけたいところだが、問題は知識の有無ではなかろう。そう、見たくないものは見えないのである。蛇足ながらその意味で、「教養とは」と問われたら筆者は「世界観の構築なり」と声を大にして（世界の中心で）叫びたい。

さて「○○語圏の文化／社会」は副専攻制度の始動に合わせ、今年度初めて設置された。科目枠としても初お目見え、となると、いくら登録済みといえど模様眺めの学生が多かろう―そこで「スペイン語圏の文化」初回では「来週以降来なくなる学生にもせめてこれだけは言いたい」との悲壮な決意の下、否、もってけドロボー式発想に基づき、「スペイン語でスペイン語のことを何と言うか」を講じた。

スペイン語をまさしく履修中の学生ならば español（英語の Spanish に相当する語）を挙げてくれるだろう。なるほど言語科目としての教科書には大抵この語がある。しかし現実には「（カステラの語源となった）カスティリャ王国の言語」を本義とする語 castellano の出番が多い。むしろ現行国家スペインの枠内でこそ castellano と呼ぶのが正式かつ見識なのである（スペイン王国 1978 年憲法第３条）。なお憲法において言語（公用語）を規定するのはスペイン語圏に限らないが、近代国家体制下にあって言語は憲法マターであることを自覚してもらうのも、日本的国家主義のデトックスには欠かせない一歩と言える。

話を元に戻し、カステラといえば文明堂。この意味深長な屋号の由来にし

ばし思いを馳せ……といきたいところだが、どっこい、池袋駅にも南蛮人表象を掲げた出店があるというのに、訊いてみると学生の半分はイメージが湧かない。（いや長崎屋でも構わないのだが。）ガクモンの糸口は毎朝毎夕の通学途上にあり。果たして明日からはあの南蛮人之図が学生たちの目に入るだろうか。そしてなぜ español ではなく castellano なのか。その続きは本講義でどうぞ。

繰り返すが、スペイン語はスペインという国家の言語、ではない。ではスペイン語圏とは世界のどの部分なのか。スペイン語とは今や圧倒的にアメリカの言語である。スペイン国家の人口はスペイン語話者人口の１割に過ぎず、スペイン語を話す人の 10 人に９人まではアメリカ人である。

ここで再びスペイン語圏は日本的国家主義と大衝突を起こす。日本社会に流通する「アメリカ」の語は大いなる誤解をはびこらせているからである。しかしアメリカとはアメリカ大陸のこと。北はアラスカから南はフエゴ島までの広大な領域を包む。アメリカ合州国―U．S．A．に長く住まい、その帝国主義性を既に見抜いていたキューバの思想家ホセ・マルティ（1853-95）は、貪欲なアメリカに対抗する「われわれのアメリカ」理念をうち立て、キューバおよびプエルト・リコの独立に命を賭した。

翻って日本では、御承知の通り「アメリカ」がワシントンD．C．を首都とする国家のことしか意味しない。心理的・地理的に距離のあるスペインでは、日本式の「アメリカ人」を指してamericanoが使われることもままあるものの、本家アメリカにおいてブッシュやらオバマやらはnorteamericanoと称される**。「アメリカ」を僭称されてはならじとの矜持はスペイン語の単語使いにさえ現われる。

瑣末なことのように見えるが、言語は世界観の表出にほかならない。この語は時に深刻な誤解をもたらす。たとえばこの冬公開された映画「マラドーナ」に材を採ろう。映画界の風雲児E・クストリッツァがサッカー界の神にして悪童を追ったこのドキュメンタリーには、口の悪さでここ数年国際政治をかき回すベネズエラ大統領も登場する。その演説に「アメリカ人民よ立ち上がれ」とのくだりがあるのだが、字幕は「アメリカ」を取り違え、どうも「米国よ思い知れ」に近い口調となっていた（試写を一度観ただけのため字幕を正確には再現できないが、「アメリカ」が全くの誤訳だったことは確かである）。字幕翻訳者がスペイン語を解する人かどうかわからないが、英語のダイアログ記録から訳された疑いが強い。チャベスが反米の旗手に祀り上げられるのも、ひょっとすると半分は誤訳のせいかもしれない。

スペイン語は多分にアメリカの言語であり、アメリカとはU．S．A．のことではない。たったこれだけのことを浸透させるのにどれほどの労力が必要か。百回唱えてもさっぱり受け入れてもらえないほど日本においてその逆の思い込みは強い。残念ながらそのことは、期末試験の答案にまたもや如実に示された。

ちなみに、他大学での経験はあるが、立教生全学年向けに一斉講義をしたのはほぼ初めてであった。試験結果から、３、４年生には概ね話が通じていたが、１、２年生には前提部分の理解も難しかったらしいことが判明した。これをどう見るべきか。大学教育の甲斐あって３、４年には大人の話ができると喜ぶべきか、大学教育の前半はかなりの無駄だと嘆くべきか。早い段階に履修した科目は成績が悪くなりがちという

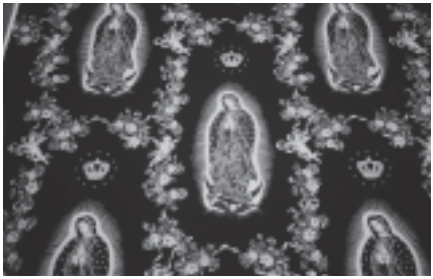
ことになると、学生の立場からは因果なお勤めと言えそうだ。

ただ面白いことに、「スペイン語はU. S. A. の言語」だと誤解されれば、これはこれで成り立つのである。まさしく米国内にスペイン語は確固たる勢力を築いており、国家単位での話者人口を数えると、現在第１位のメキシコを米国が追い抜くのは時間の問題。「日米同盟」がそんなに大事なら、日本の将来を担う（？）若者にはその同盟とやらの相手がスペイン語を話しているかもしれないことを是非とも知っておいてもらいたい。

「スペイン語」「アメリカ」に次ぐ講義の第三の柱には「宗教」を据えた。かつて国家と一体化した反動（即ち裏返しの日本的国家主義）であろうが、宗教もまた日本社会においては扱いにくい。「無節操」が「寛容」と混同され、一神教は不寛容の代名詞とされがちである。マルクス主義に傾斜する以前の日本のエリートたちが数多くキリスト教の（文字通り）洗礼を受けたことは不当に忘れ去られている。一方、周知の通りスペイン語圏はほぼカトリックの世界。鈍ったとはいえ出生率の高さからまだ信者拡大も見込め、ヴァチカンにとっては頼みの綱である（実は新宗教諸派の追撃も激しいが……）。

筆者はカトリックおよびキリスト教を称揚する立場にはないが、武力と言語さらに信仰による征服の事実なくして現在のスペイン語圏は成立し得ない。俗にスペイン語は「神と話すことば」と評され、固有名詞にも慣用句にも聖性がつきまとう。国家が信用できない分、ところによっては、誰もが一目おく権威として教会が紛争の仲裁に乗り出すことも珍しくない。

そうした背景をもつ社会にあって、信仰の日常はイエスではなく聖母・聖人への崇敬に結晶する。講義では、なかでも代表的な「グアダルーペの聖母」（メキシコおよびアメリカ大陸の守護聖母）を採り上げ、異端から公認聖母へ至る歩みと、聖母に願かけした信者たちが満願成就の際に奉納する ex-voto（一種の絵馬）とを紹介した。ex-voto は今やポップ・アートとして注目を集



め、信者の依頼に応じこれを描く「有名」作家の「作品集」まで出版されている。

教室では書画カメラを用い、何点かの作品を見せたが、学生にとってはいささかショッキングだったようだ。不倫現場に踏み込まれながらすんでのところで事なきを得たのも、砂漠を突っ切り無事「北」に入国しおおせたのも、交通事故で一命をとりとめたのも、強姦という不幸に襲われたが命だけは助かったのも、みんなみんな聖母さまのおかげ。その色づかい、素朴な描線とは裏腹に、ex-voto は庶民が日々生き抜かなければならない厳しい現実を抉り出している。

新年早々、渋谷駅前で筆者はとんでもないものに出くわした（写真）。日本を象徴するスポットとして外国映画にもしばしば映し出される交差点の、人と色と音の洪水。その只中に突如グアダルーペの聖母が姿をお見せになったのである。聖母を図柄にあしらった生地が「アメリカン・プリント」と名づけられ、布地屋の店頭を飾っていた。アメリカン・プリント……またも

や誤解である。いやしかし一周遅れの誤解に現実が追いつく日も遠くはない。そう、いずれアメリカ＝U．S．A．こそスペイン語圏文化を代表する存在となるのである。「スペイン語圏の文化」を受講した学生が渋谷駅頭を通りがかったら、この布地に気がつき足を止めてくれるだろうか。己れの関心事なら放っておいても目に飛び込んでくる。人と色と音の溢れ返るこの交差点に聖母像を見出す学生がひとりでもいたならば、講義は成功したと考えるべきなのだろう。

* 英語はもちろん、他の言語にも多かれ少なかれ当てはまるが、スペイン語はその流通範囲の広大さに比して偏差が小さく、しかもこれを母語とする頭数の多さにおいて他と一線を画す。

** 直訳すれば「北アメリカ人」。しかしいわゆるカナダ人には canadiense、メキシコ人には mexicano/a が用いられており、北アメリカ人＝アメリカ合衆国人（市民）の等式が成り立っていることに疑いの余地はない。

［付記］本稿校正時になって筆者は都内で再び聖母を目撃する。某ブランドが 80 年代西海岸ファッションとして売り出している T シャツ・ブルゾン類の背にお姿があった。ということは、学生諸君の方がはるかに聖母となじみの仲かもしれないのである。

いいじま　みどり
（本学異文化コミュニケーション学部准教授）